

## いわての未来を創る「医福食農」セミナー ＜第1回 農と福祉の相乗効果！＞を開催

地域における農業と食料、医療や福祉の関わりによる「医福食農」連携が広がっており、農業と障害者支援の連携にどう取り組めば良いかを考える「いわての未来を創る『医福食農』セミナー」を、東北農政局盛岡地域センター主催により、平成27年3月18日（水）に岩手県盛岡市ホテルルイズにおいて開催しました。

農業者、福祉法人、行政機関等を合わせて約70名の参加がありました。

基調講演では、(株)キースタッフ代表取締役 鳥巢 研二 氏から「医福食農、農と福祉の連携」と題し、医福食農連携の取組事例として6次産業化がある



(株)キースタッフ 鳥巢 研二 氏

が、農家が全てやる事は難しいことや、どうマッチングしていくかがポイントであること、岩手県を医福食農の先進県としてはどうか、といった話がされました。これからは地場産食材の加工・販売を地域で連携して取り組む必要があることや、どこに売り込んでいくかが大事といった課題の提起がありました。

事例発表では、農福連携の取組を実践されている社会福祉法人 岩手更生会 まめ工房緑の郷 所長 鈴木 淳 氏から、障害者を職業訓練を通して支援するため自家生産した大豆を原料とし豆腐・油揚げ等の製造・販売のほか、農産物生産、農作業受託等を行っている旨の紹介がありました。6次産業化では、商品を自力で開発するのは難しいことや、営業活動も難しい、施設では限界があるといった話がされました。



岩手更生会まめ工房緑の郷 鈴木 淳 氏

～いま、現場では～と題したパネルディスカッションでは、それぞれの分野3名から取組や課題等について御紹介をいただきました。



岩手県農業法人協会 橋本 正成 氏

岩手県農業法人協会 副会長 橋本 正成 氏からは、岩手県では、米を除く作物の生産が激減しており、収穫時の機械化も進まず、後継者も作業員も不足しているという現状の紹介がありました。障害者雇用のポイントとしては社会福祉法人の指導員との関係が重要であり、指導員の熟練がないと障害者の方と

も噛み合わなくなること、支援施設の方には「施設だからしょうがない」というスタンスでは続かない、プロになってもらいたい、というアドバイスがありました。

はつらつ農場(株)代表取締役社長 小笠原 栄子 氏からは、障害者の方が中心となり菌床しいたけの生産活動を行っていることや、障害者が自立して地域で働けるだけの知識を身につけられる場所でありたいという理念が語られました。障害者には、続けることの大切さを身につけて欲しいという思いや、障害者も時間をかければ貴重な労働力となるパワーを持っていることなど、今後の展望についても紹介がありました。



はつらつ農場 小笠原 栄子 氏



岩手日報社 志田 澄子 氏

岩手日報社報道部次長 志田 澄子 氏からは、福祉施設等取材し、連載で90回以上の記事を紙面紹介したことを通して、障害者支援施設での野菜生産は、無農薬・低農薬など安全・安心な作物へのこだわりがあり、岩手の障害者支援施設が作る商品は安全・安心というイメージをアピールできたのではないかと、印象に残ったこととして、ある施設長から「障害者は商品を通じ社会に必要とされ喜ばれることで Win-Win の関係となり、作り手の生きがいになる」というお話の紹介がありました。

その後、マッチングセッション ～農と福祉の出会いの場～ として、名刺交換・交流の場が設けられ、会場内でパネリスト及びセミナー参加者の皆さんで名刺・意見交換が行われました。



(会場の様子)